

## その四 広島文教女子大学附属幼稚園

### (一) 附属幼稚園の歩み

#### 草創期

広島文教女子大学短期大学部に、昭和四十五年四月幼児教育学科が開設された。それに伴って、教育実習園の設置が必要となり、可部町上原のキャンパス内に建設することとなった。同年十二月十日、広島文教女子大学附属幼稚園設置認可申請書を広島県知事に提出し、翌年二月一日設置認可を受けた。園舎建築工事は、四十五年十月末に菱電商事株式会社広島支店に発注し、翌年三月三十一日完成した。

かくて、昭和四十六年四月一日、広島文教女子大学附属幼稚園が開園し、四月十五日第一回入園式を遊戯室において挙行了。初代園長は学園理事長武田ミキが兼務し、専任教員は主任土屋孝子、教諭島田信枝の二名、園児は三歳児八名、四歳児十八名、五歳児一名、計二十七名で発足した。当時の状況を、主任土屋孝子は次のように回顧している。

真新しい教室が五部屋並んでいる中の、二部屋しか必要としないのは肩身の狭い思いであった。ともあれ、全力投球しようと誓いあって歴史の一步を踏み出した。一台の園バスで可部・八木・緑井・川内を巡回したので一

時間を要した。特に初日は、園児の家を確認しながら運行したこともあって、園に到着したのは十時三十分であった。十一時にはまた乗車して帰宅するのである。この間、子どもにとっては僅か三十分の不満足な遊びであり、教員にとっては地獄のような三十分であった。逃げ帰ろうとする子ども、泣きわめく子ども、名前も覚えなければならぬし、楽しみも与えなければならぬ。しかし玩具を出す余裕もない。教員二名では手に余り、大分から武田・横山両先生に見張り番をお願いした。教員一名は朝も帰りも園バスに乗り、他の一名は朝の受け入れ準備、終了後の掃除、外来者の応接とテンテコ舞いであった。

開園から四十八年度までの三年間は、いわゆる草創期であって、教員の経験も浅く、教員備品も不十分であり、多忙な毎日に追い廻わされた。しかし、教育に対する若いひた向きの情熱と全員の協力によって、困難を克服して前進を続けた。この間に、園児も逐年増加して学則定員通りの五学級百四十名に達し、教員も六名に増え、その教育力も向上した。

なお、四十七年四月一日前可部町教育委員会教育長海渡和雄が二代園長に就任したが、四十九年三月十四日死亡退職し、広島文教女子大学教授武田学千が三代園長を兼務した。

### 充実期

昭和四十九年頃から充実期に入り、保育内容が逐次向上充実し、(三)で述べる「本園教育の特色」も、年々成果をあげてきた。その端的な現れとして、五十年十二月二十二日NHK教育テレビで本園の「わらべ歌の指導」、五十二年十一月十四日中国テレビで本園の「図書の貸出し」、五十三年十二月七日NHK教育テレビで本園の「日常生活訓練」、五十七年十一月八日教育テレビで本園の「手づくり絵本」が、それぞれ三十分番組として放映された。折から、第二次ベビーブームの子どもの入園期を迎え、多数の入園希望者が本園に殺到し、毎年十数名断わってもなお学則定員を二十名前後越える園児を收容しなければならない状況となった。

なお、五十年四月一日前山口県立宇部高等学校長佐伯茂重が四代園長に就任した。

五十一年度から、モンテッソーリ教育法と取り組むために、組織編成を従来の横割り（年齢別）から縦割りに変更し、五組とも三・四・五歳児の混合編成とした。その主な理由は、

① 子どもたちが、過度の競争心・不用な優越感劣等感をおこさないで、（異年齢集団の方が起りにくい）マイペースで伸び伸びと自主性・主体性・創造性を発揮しやすくするため。

② 子どもたちの思いやりの心を育ちやすくするため。幼稚園年代の子どもの場合、自分の力を惜みなく他人に与える心は同年齢集団では育ち難く、自分より幼なく手を貸してやる対象を得て育つもの。

③ 三・四・五歳児の交流を強化し、子どもたちが縦の繋りの中で鍛えられ養われるものを育てるため。（例えば、年少児の自分勝手な行動に対し、子どもたちは大人のように手加減をしない。最近では兄弟数が少なくなり、また近隣の異年齢集団の中で遊ぶ機会も少なくなっている）

である。この縦割り組織編成は一応成功し、園児にとってプラスが多かったと評価している。なお、この組織編成は、しばしば解体して子どもの選択種目別組織編成に変え（本園では選択保育を多く取り入れて）、また、必要に応じて（運動会の練習等）年齢別編成に組み替える等、融通性をもったものである。

五十三年度末、出産・結婚のため四人の教員が一度に退職した。その結果、五十四年度初めの教員組織は、園長主任を除けば、教職経験二年の者二名（一名は他園より転入）、一年の者一名、大学新卒業者三名という非常事態となった。全員必死にがんばり、大過なく年度を終わった時はホッとした。順調に発展を続けた本園は、昭和五十五年創立十周年を迎え、次の記念事業を行った。

① 卒園者住所録の編集

卒園児のお母さん数名が中心となり、大変な努力を払って、四九六名の卒園児の氏名・父母名・住所・電話番号・在学学校名を記載した名簿が完成した。

② 在園児に対する創立十周年のお祝い

記念式典の開催は、園児たちが意味が分からず退屈するだけなので、十周年記念運動会の日には、お祝品としてバトミントンのラケットと羽根を全園児に贈った。

③ 創立十周年記念座談会の開催

武田理事長、関係大学教官、歴代すずらん会（PTA）会長、幼稚園教職員等二十七名が出席して、十年間の本園教育の評価と現状を中心に、三時間にわたって話し合った。

④ 創立十周年記念誌の発行

記念誌は一八二ページで三部からなり、第一部では十年間の歩みを明らかにするための最少限必要な資料をまとめ、第二部では記念座談会の要点を記録し、第三部では卒園児の自由投稿作品並びに卒園児と保護者に対するアンケートの回答を掲載した。

なお、開園以来、桑原園医の熱心な指導で健康管理に一生懸命努力し、五十三年以降毎年、本園園児が広島地区の健康最優良児または優良児として、母子健康協会から表彰されている。また、五十二年から岩崎園歯科医の特別の指導で、虫歯予防と歯みがきに力を入れ、五十七年度広島地区歯の保健教育優良幼稚園として、母子健康協会から表彰された。

転換期

昭和五十五年頃から、全国的な幼稚園児の急減期に入った。最も厳しい東京都のごときは、園児減少による経営難のため、五十七年度前半に廃園六、休園二十六を出している（全国学校法人幼稚園協会の調

査)。加えて、本園の場合、園児の過半数を占めていた佐東町八木・緑井・川内地区において、公立幼稚園が五十五年度から新たに四歳児の募集を開始した（従来は五歳児のみ募集）。そのため、本園に合格していた四歳児十数名が、経済的理由から入園を辞退して、園納金の格安な公立幼稚園に流れるという思わぬ事態が起った。以後、佐東町から入園者は、急激に減少した。(二)の太字教職員園児施設の③園児の居住地を参照)

この幼稚園児の減少傾向は、今後長期的なものであり、「入園希望者を断わるのに苦勞した」「入園受付日の朝は父母が暗いうちから門前に並んだ」などということとは、夢物語と化した。そして、広島県においても醜い園児争奪や行き過ぎた入園勧誘が行われ、二度三度と監督官庁の警告を受ける有様となった。幼児教育界も本園も、一つの転換期を迎えたわけである。これをいかに乗り切っていくか、今後の大きな課題である。その対応については、(五)展望に譲ることとする。

## (二) 附属幼稚園の現状

### 教育目的と

本園教育の基本方針は、地域社会と園児の実情実態に即して、幼稚園教育要領に掲げる基本方針と

### 教育目標

武田学園建学の精神を実践し、学校教育法に示す幼稚園の目的・目標を達成することである。して

うして、本園の教育目的は「適切な物的・精神的環境を整えて、園児の心身の発達を助長する」ことである。幼児期特有の生活をしっかり体験し活動することによって、将来、社会生活においても個人生活においても、自己の資質能力を十分發揮し、生き甲斐ある充実した人生を送ることができるようになるための、基礎を培うのである。

この目的を実現するために、具体的には、ひとりひとりの子どもの発達段階に即応しながら、次に記す教育目標の達成に努める。

- ① 生活習慣の基礎を養い、強い体を育てる。
  - ② 思考と行動の自主性・自律性を養い、社会性を育てる。
  - ③ 正しく言語を使い、本好きになるように育てる。
  - ④ 豊かな情操を養い、創造性・表現意欲を育てる。
  - ⑤ 身近かな事象に挑戦探究させ、知識知能を伸ばす。
  - ⑥ 注意力の集中と持続を、繰り返し体験させ身につける。
- さらに、年齢別の重点目標は、次のとおりである。

### 三歳児

- ① 生活習慣の基礎をしっかりと身につけた子に。
- ② ひとり遊びを充分に楽しみ、機嫌よく遊べる子に。

### 四歳児

- ① 友達と遊べる子に。
- ② 表現の豊かな子に。
- ③ 自己主張のある子に。

### 五歳児

- ① 自主性のある子に。

- ② 創造力の豊かな子に。
- ③ 思いやりのある子に。
- ④ 協力して遊べる子に。

#### 保育方針

前掲の教育目的・教育目標を実現達成するために、次に記載する方針・心構えをもって毎日の保育に取り組む。

- ① 子どもの心身の健康、特に、明るく豊かな心(思いやり・素直さ・情緒の安定・社会性)、生き生きとした意欲的な心(自主性・創造性・探究心・根気)、身体諸機能の発達と体力の育成、を重点とする。
- ② 教師と子どもの心の交流、愛情の授受、信頼関係を重視し、子どもの人間性・個性を尊重し、外に現われた形、できあがった結果よりも、ひとりひとりの心の動きを大切に育てる。
- ③ 子どもの発達のペース・レディネスには個人差があることを重視し、過度の競争心や不用の優越感・劣等感をおこさせないように留意し、ひとりひとりを見極め、思い切り力を出し切るよう伸び伸びと育てる。
- ④ 強制や叱責による規制よりも、教師の事前準備・環境設定・是認・承認・激励によって子どもたちを望ましい行動に誘うことを主とし、自信と積極性をもたせ、心が自主的・創造的に働くよう育てる。
- ⑤ 知識知能や思考については、抽象的観念的なことを体系的に教え込むのではなく、子どもの好奇心・探究心を旺盛にし、具体的・行動的に考え挑戦する機会を準備し、「為すことによって学ばせ」自然に総合的に伸ばす。
- ⑥ 特に、年少児の保育においては、子どもの手と心の動きが一つの連続作業であることに注目し、身の廻りのこととは自分でする基礎的生活習慣の自立につとめ、器用さと知能の発達をはかる。
- ⑦ 造形・音楽等については、豊かな情操と創造性を養うことを目指し、そのものを楽しみ好きになること、自分

を思い切り表現することを第一とし、技術中心主義に流れないよう特に留意する。

⑧ 子どもは、全力を出して自分のしたいことを思い切りやることによって、心身ともに伸びるものである。そして、最も熱中し生き生きと活動するのは遊びである。毎日十分満足するまで自由遊びの時間を確保する。

⑨ 子どもは、仲間の影響を受けて啓発され、相互に教育し合いながら伸びていく。明るく暖かい人間的触れ合いの中で、相互に信頼し協力する集団、ひとりひとりが生き生きと活動する集団、互いの個性を大事にしなが高め合っていく集団作りに努める。

### 教職員・園児・施設

#### ① 教職員（定員と現員）

区 分	園 長	主 任	教 諭	助 教 諭	養 護 教 諭	事 務 職 員	運 転 手
学 則 定 員	1	1	5	1	1	1	1
現員（五十一年度）	1	1	6	1	1	1	2
現員（五十七年度）	1	1	5	1	1（兼）	1	2

#### ② 園児（定員と現員）

区 分	三 歳 児	四 歳 児	五 歳 児	計
学 則 定 員	20	60	60	140
現員（五十一年度）	28	70	59	157
現員（五十七年度）	20	47	54	121

備考 園児減少の一因は、昭和五十五年より全国的な幼稚園児の急減期に入ったためである。



③ 園児の居住地

区 分		上 原	中 島	可 <small>その</small> 部の	八 木	川 内	緑 井	安 古 市	計
現員 (五十七年度)	現員 (五十一年度)	18	15						
			26	8					
				31	33				
					28	40			
						11	49		
							7	9	
								0	3
									121
									157

備考 八木・川内地区の園児減少の理由は、昭和五十五年より佐東町内の公立幼稚園が四歳児の募集を始め、入園希望者が園納金の安い公立に流れたためである。

④ 園地と園舎

区 分	面 積
園 舎 敷 地	817㎡
運 動 場	646㎡
庭 園	111㎡
計	1,574㎡

室 名	数	面 積	
保 育 室	5	332㎡	
遊 戯 室	1	100㎡	
管 理 室	職 員 室	1	37㎡
	機 械 室	1	12㎡
	保 健 室	1	12㎡
	倉 庫	2	23㎡
	便 所	1	14㎡
	脱 衣 室	1	9㎡
	プ ー ル 室	1	24㎡
	面 接 室	1	9㎡
	実 験 室	2	24㎡
	配 膳 室	1	14㎡
小 計		178㎡	
廊 下		207㎡	
総 計		817㎡	

備考 園舎はすべて鉄筋コンクリート平屋建てである。

保育室五は、それぞれ独立した建物で便所を備えている。

年中行事

幼児の保育においては、彼らの興味関心を重視し、これを抛り所とし、あるいはこれを喚起して、さらに広め深めていくことが基本原理である。この意味から、園の行う年中行事は大きな教育的意味をもち、目標が明確に確立しておれば、教育的成果をあげることができる。本園においても、保育の重要な手掛かりで

あり大切な体験であると考え、五十七年度にも次のことを実施した。年次によって、一・二変えることもあるが、十年に亘って検討し積みあげてきたものである。

四月 入園式、学園創立記念、観劇会

五月 端午の節句、福王寺親子登山、母と子の集い

六月 父親参観日、交通安全教室、組別保護者懇談会、内科・歯科・眼科・耳鼻科検診

七月 七夕まつり、合宿保育、花火大会

九月 敬老の公開保育

十月 お月見、運動会、作品展

十一月 芋掘り、遠足、歯科検診（二回目）

十二月 餅つき大会

一月 新年互礼会（園児と教師の）

二月 節分豆まき、学習発表会（公開保育と呼ぶ）、組別保護者懇談会

三月 ひな祭り、お別れパーティー、お別れ遠足、卒園式

備考 誕生会と身長体重測定は毎月実施している。

お店屋さんごっこ・タコあげ大会・羽根つき大会等、従前実施していたが、カリキュラムの関係から消滅したものもある。

### 教育課程

年度初め春季休園中に職員会議を開いて、前年度の教育課程・教育実践を反省評価し、次のような新年度の教育計画を製作する。

#### ① 年間（月別）保育目標

## ② 年齢別年間指導目標

## ③ 領域別年間保育計画

これは、保健衛生・体育・社会・自然・言語・音楽リズム・絵画造形に分けて作製している。各教師は、この年間計画を踏まえて月案・週案・日案を作製し、日々の保育に臨むわけである。

次に、前述①の年間保育目標、②のうち四歳児年間指導目標、③のうち体育と言語の保育計画を掲げておく。

## 年間保育目標（昭和五十七年度）

月	単元	目 標	課 題
4	友達や先生に慣れる	幼稚園生活の楽しさを知り集団生活の基礎を覚える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・新しい友達に知っていることを教えてあげる</li> <li>・本をみる楽しさにふれる</li> <li>・みんなでお弁当を食べる</li> </ul>
5	元気いっぱいいたのしく遊ぶ	野外での遊びを充分にして健康な生活習慣を築く	<ul style="list-style-type: none"> <li>・頑張って山に登る</li> <li>・共同で作った鯉のぼりをあげる</li> <li>・固定遊具の正しい扱い方を覚える</li> </ul>
6	小動物と遊ぶ	青虫、かたつむり、おたまじゃくしの飼育をおおして愛情をもつ	<ul style="list-style-type: none"> <li>・青虫の観察をする</li> <li>・かたつむりを集める</li> <li>・おたまじゃくしから蛙を育てる</li> </ul>
7	水遊びをする	水遊びをとおして 友達との交わりを深めていく	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プール遊びのルールを覚える</li> <li>・シャボン玉をする</li> <li>・ドロンコ遊びをする</li> </ul>
8	海や山に行く	家族といっしょに海や山の経験をす	<ul style="list-style-type: none"> <li>・食物に気をつけお昼ねをする</li> </ul>

3	2	1	12	11	10	9
卒園を祝う	郵便屋さんごっこをする	室内遊びを楽しむ	お正月を待つ	秋の自然にふれる	造形活動をする	体を鍛える
迎える準備をする	楽しいお別れ会をし、新しい友達を	お正月の楽しい遊びを再現する	発表会の役割りを分担する 楽しいお正月を送るための遊びを工夫する	散歩して落葉や木の実をみたりカマキリやコオロギと遊ぶ	いろいろな経験をとおして創造的な作品をつくる	規律正しい生活にもどり体育活動をとおして体を鍛える
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小さい人に残すことは、大きな人におくる言葉を考える</li> <li>・ 卒園していく人を祝福するための演出を考える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 手紙をかく</li> <li>・ 郵便屋さんの仕事をしてみる</li> <li>・ 球根で育った花を観察する</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ こままわし、羽根つきをする</li> <li>・ カルタ、スゴロクを作って遊ぶ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 羽子板やこまなどをつくる</li> <li>・ 手遊びを楽しむ</li> <li>・ (まりつき、あやとり、こままわし)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 遠足で美しい木の葉を集める</li> <li>・ うた、劇、合奏など力一杯する</li> <li>・ 友達の発表を静かにみる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 表現材料を多様に試みる</li> <li>・ 思い切った自由な表現をする</li> <li>・ テーマにそった共同作業をする</li> <li>・ 作品展で友達の作品を観る</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 体操やフォークダンスのリズムを正しくとる</li> <li>・ 競技のルール、集団の規律を守る</li> </ul>

四歳児年間指導目標（昭和五十七年度）

あ そ び				ねらい		
主 な 経 験						
知的活動						
自 (認識) 然	言 (視聴覚) 語	造 形	音楽リズム	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達と遊べる</li> <li>・表現の豊かな子</li> <li>・自己主張のある子</li> </ul>		
					社会性	生活指導
					<ul style="list-style-type: none"> <li>・園に親しみ楽しく友達と遊ぶ</li> <li>・「おはよう」「さようなら」の挨拶ができる、自分の名前が言える</li> <li>・順番に並らぶ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・用便が一人で出来る</li> <li>・手洗いができる</li> <li>・使ったものを片付ける</li> <li>・一人ではみがき、うがいができる</li> </ul>
<ul style="list-style-type: none"> <li>・草花に水をやる</li> <li>・種をまいて成長をみる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・絵本、紙芝居、テレビをみる</li> <li>・(貸し出し絵本に参加する)</li> <li>・必要な事(思ったこと)が言える</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・好きなものを描いたり造ったりする(粘土、クレヨン、地面、フィングーパーペイント)</li> <li>・のり、はさみを正しく使う</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・みんなと歌う</li> <li>・リズム打ちをする(カスターネット)</li> <li>・普通のはやさの曲にあわせて歩く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一期</li> </ul>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・落ち葉、木の实などで遊ぶ</li> <li>・小動物と遊ぶ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・先生や友達の話聞く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・いろいろな表現材料を使ってみる</li> <li>・(絵の具・木工・版画・絵本作り)</li> <li>・縫いものなど)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どならないようにうたう</li> <li>・拍子打ちをする(鈴、タンバリン)</li> <li>・みんなで合奏する</li> <li>・ヒルタッチができる</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・二期</li> </ul>		
<ul style="list-style-type: none"> <li>・冬の木や花を見る</li> <li>・氷や霜をさがす</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文字や絵で手紙を書く</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・遊びに必要なものを製作する</li> <li>・(おめんなど)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・歌詞をはっきりうたう</li> <li>・スキップをしようとする</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・三期</li> </ul>		

I 期				いねら
固定遊具の正しい遊び方を知る				
点検し記録するもの	基 本		固定遊具	
	平均台	とび箱		
・前歩き、横歩き、バランスをとる	・縄とび ・一人とびをする。二人まわしに参加する	・鉄棒 ・前まわりをする	・クライジム等の正しいのり方を知る ・のぼり棒を降りる	五 歳
↓またがる、腰かける、歩いてみる	↓縄をもってあそぶ、とび ↓横ところがり、前転をしてみる	↓とびあがり停止をする	まわっているクライジムに近づかない。 外からぶらさがらない。 みんなが棒をもってからまわす ブランコ・滑り台で遊ぶ	四 歳
↓手をとってもらって歩く	↓二段をとんでみる ↓一段(二段)からとびおろる	↓鉄棒にぶらさがる ↓年長・中がとぶのをみる ↓横ところがりを ↓二段(二段)からとびおろる	滑り台で遊ぶ ↓(年長と手をつないで) ↓先生と一緒にかけっこをする ↓からだを動かす	三 歳

年間保育計画表 体育(昭和五十七年度)

あ そ び	
主 な 経 験	
動 的 活 動	
集団あそび	体 育
・「はないちもんめ」 ・「だるまさんがころんだ」	・散歩、かけっこをして足を鍛える、鉄棒でとびあがり停止をする ・マットや平均台を使う
・「子どもの王様」「あやとり」	・なわとび、鉄棒(前まわり)をする ・とび箱をとぶ(二段)
・「カルタとり」	・ボール遊び ・両足とび、片足とびをする

		II		期				
		運動会・遠足などをおして身体を鍛える						
基本	遊	運動会	点検し、記録してい			基本	固定遊具	プール遊び
			平均台	縄とび	縄とび			
ボール	走る	遊	平均台	縄とび	縄とび	鉄棒	歩く	遊ぶ
・野球、サッカー、ドッジ、ハンド等ゲームをする	・園庭を走る ・バランスボールなどで遊ぶ	・縄とびをする ・玉入れ、つなひきをする ・体操(ラジオ体操をする)	・自由平均台の上を歩ける ・二段をとぶ ・前歩きをする	・前転が正しい手のつき方、頭の入れ方でできる ・蛙とび、側転をする	・二人まわしでまわっているのにはいる ・八の字とび、走りとびをする	・足かけまわり、逆上りをする ・できるだけ長くぶらさがる ・二人まわしでまわっているのにはいる	・直線の線上歩行をする ・円形リレーのルールを知る ・バトンタッチを正確にする	・のぼり棒をのぼる(雲梯) ・片足ケンケン、スキップをする
			↓ 二段をとぶ ↓ 前歩きをする	↓ 前転が正しい手のつき方、頭の入れ方でできる ↓ 蛙とび、側転をする	↓ 二人まわしでまわっているのにはいる ↓ 八の字とび、走りとびをする	↓ 前まわりをする ↓ 逆上りをする ↓ 二人まわしでまわっているのにはいる	↓ リレーに参加する	↓ こわがらないでプールに入る(パンツで入る) ↓ のぼり棒をおりる
			↓ 平均台を歩く	↓ 前転をする	↓ 二人まわしに参加する縄をもつて遊ぶ	↓ 前まわりをする ↓ 二人まわしに参加する縄をもつて遊ぶ	↓ 友達とかけっこをする	↓ からだに水をかける ↓ 両足とびをする ↓ ケンケンをしてみる

年間保育計画表 言語 (昭和五十七年度)

I 期	ねらい	五 歳
楽しい絵本やお話にふれる		
生 活	四 歳	三 歳
<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 絵本を大切にみる</li> <li>・ 借りたい絵本を自分で選んで借りる</li> <li>・ 一人で選べない人を助けてあげる</li> <li>・ 読んでもらいたい絵本の名前が言える</li> <li>・ おとうさんやおかあさんの家での仕事 (手伝い) について知っていることを話してみる</li> <li>(父の日、母の日に関して)</li> <li>・ 話し合いでルール、きまりを決める (合宿等)</li> <li>・ 幻燈を見る</li> <li>・ 遠足、合宿での楽しかった事を話し合い伝える</li> </ul>		
	<ul style="list-style-type: none"> <li>↓ (組、自分の名前をはっきり言う)</li> <li>・ 返す絵本は袋から出して組の棚へ返す</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>↓ (自分の名前をはっきり言う)</li> <li>・ 借りた絵本は袋に入れて持ち帰り、返す日にもつてくる</li> <li>↓ お父さん、お母さんの名前がいえる</li> <li>・ 呼ばれたら返事をする</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「おはよう」「きょうなら」「いただきます」「ごちそうさま」を言う</li> </ul>	

III 期	
体力の総点検をする	
雪の遊び	点検し、記録していくもの
平均台	<ul style="list-style-type: none"> <li>とび箱</li> <li>三段をとびこす</li> <li>であいじゃんけんをする</li> </ul>
雪合戦をする	<ul style="list-style-type: none"> <li>鉄棒</li> <li>逆上りの連続に挑戦する</li> <li>縄とび</li> <li>後とびや走りとびをする</li> <li>二人まわしのできるだけたくさんとぶ</li> <li>(二人で一緒にとぶ)</li> <li>マット</li> <li>三点倒立をする</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>↓ 逆上りをする</li> <li>↓ 二人まわしで、まわっているのに入れ、そして一〇〇前後の連続がとべるようになる</li> <li>↓ 前転を連続する</li> <li>↓ 三段をとびこそうとする</li> <li>↓ であいじゃんけんに加わる</li> <li>↓ くりかえして、前転をしってみる</li> <li>↓ 二段をとほうとする</li> <li>↓ 台の上を一人で歩く</li> </ul>
	<ul style="list-style-type: none"> <li>↓ 前まわりをする</li> <li>・ 一人とびをしようとする</li> <li>↓ 二人まわしで三〇回位とぶ</li> </ul>



II		期	
ことばあそび・文字あそびをする			
絵本	生	活	絵本ストーリーング
<p>・お正月の楽しかった事を話す ・「あけましておめでとう」を言う</p>	<p>・「わたし」「きもち」 「どうぶつ」「とり」 「ことばあそびうた」</p>	<p>・困った事をみんなで考える ・けんかをしたり、失敗をした時はその場で原因を考えるようにする ・お話を作る（絵本、紙芝居）</p>	<p>・「ぎっそう」「たんぼぼ」 「まめ」「ははのははなし」 ・七夕の話を聞く</p>
	<p>・ことばあそびをする 〔伝言ゲーム（一文字、二文字…と続ける）〕 ・文字書きをする 五十音「あいうえお表」 しりとり 二文字、三文字あつめ</p>	<p>・自分ですらなで正しく書く ・劇あそびを楽しむ （なりたいたい役を言う、セリフをはっきり言う）</p>	<p>・「おひさまがいつぱい」 「はなのあなのはなし」 「あおくときいろちゃん」</p>
	<p>↓自分の名前が読める （なりたいたい役を言う）</p>	<p>↓自分で絵本を作ってみる （絵を描いて文字を書いてもらう） ・「ことばあつめ」しりとり ・わらべうたであそぶ 「あぶくたつた」等</p>	<p>・楽しかった事をみんなの前で話す 〔夏休み中の生活〕 運動会 作品展等</p>
	<p>↓劇あそびを観る （セリフが言える）</p>	<p>・大きい人の作った絵本や紙芝居を見る ・手あそびうたを覚える 「にんじんが一本」等</p>	<p>・年長、年中の話を聞く ・「おはよう」「さようなら」が自分から言えるようになる</p>
	<p>「どこからきたの」 「くまちゃんのごあいさつ」 「いたいのいたいのとんでいけ」</p>		<p>くまちゃんシリーズ 「いいへんじ」</p>

III 期	
みんなの前で発表する	
絵本ストーリー	生活
<p>ひなまつり、節分の話聞く</p> <p>「大きくなりすぎたくま」</p> <p>「なみだちゃんばんざい」</p>	<p>・小さい人に残す言葉を考えて、自分で書く</p> <p>・郵便屋さんごっこをする</p> <p>(手紙を読んだり書いたりする)</p> <p>・お別れ遠足の楽しかった事を小さい子に話してあげる</p> <p>・長編物語を聞く</p> <p>「もりのへなそうる」「みんなくいしんぼう」</p>
<p>「とけいの本①②」</p> <p>「まいごになったにはんざるのはなし」</p>	<p>↓大きい人に送る言葉を考える</p> <p>(文字や絵で手紙を書く)</p> <p>・遠足の話聞く</p>
<p>「しんせつなもだち」</p>	<p>↓</p> <p>(絵で書く)</p> <p>「はなをくんくん」</p>

### (三) 附属幼稚園の教育の特色

本園の教育は、(一)付属幼稚園の現状で述べた方針・目標によって一貫しており、保育活動・保育実践のどの部分をとってみても、独自の目的・目標・やり方が確然としている。従って、本園教育の特色といふべきものは数多いわけであるが、その中から次の四つの事項を選んで記すことにする。

#### 図書貸出し

すべての園児が本好きになって欲しいと願って、開園と同時に「図書の貸し出し」をはじめた。現在、本園の図書室には、子ども用図書が約二千冊備えてある。毎週土曜日、登園した子どもか

ら三々五々図書室に行き、人の助けを借ることなく（自主的に）、自分の読みたい本を一冊選ぶ。決して衝動的な選択ではなく、一冊一冊中を開いて納得がいくまでジックリ選び（伝統ができている）、なかには三十分も四十分もかけて決める子も多い。

この本を家に持ち帰って母親に読んでもらい（愛情をこめて読むよう園より要望）、自分でも読んで水曜日返本する。彼らは興味と必要に迫られて無理なく文字を覚え、本が読めるようになる。本園の卒園児は、小学校進学後も「本好きでよく読む者が多い」といわれている。

貸し出した本は、個人別に読書カードに整理し記録する。そのカードを分類してみると、次の四つのパターンになる。

- ① 同じ本を何度も繰り返し借りている子（三歳児に多い）
- ② 好きな本の領域・傾向が決まっている子（乗物・昆虫・動物・科学等）
- ③ 連続もの・シリーズを追って読む子（ちいちゃん・機関車等）
- ④ バラバラに漁っていて、興味の対象が掴めない子

①②③の子は、概ね意志がはっきりしていて平素の生活にも主体性があり、注意力の集中持続がよくできる。④の子は思考が捉え難く、一見明るくしつかりしているような子でも、移り気であったり根気がなかったり、不安定なものを感ずる。このように、「図書の貸し出し」は、子どもの理解指導にも重要な手掛りを提供してくれる。

**モンテッソーリ** 昭和五十一年度、モンテッソーリ教育法導入のため、縦割り組編成を採用したことは、(一)で述べておおりである。モンテッソーリ教育法の眼目は、「注意力の集中と持続を体験し身につけること」である。

ることによって、子どもたちの正常なパーソナリティ（真の天性を現わした子ども）を育成しようとする」点にある。

と考えている。そこで、まず五十年代から、集中力や持続力・選択する能力（自主性・自律性・自発性）を育てるための感覚的教具と日常生活用具を必要最少限揃え、以後少しづつ整えていった。また、毎年全教員が、全国各地で開催されているモンテッソーリ教育講習会に出席する等研修に努め、同時に日々の保育実践を積み重ねていった。その結果、五十三・五十四年度頃から、園児たちの遊びや作業の持続時間が伸び、集中力も高まってきた。そして、先生から指示命令されたからではなく、自分がやりたいからするという自己学習のようなものが、自由時間に次第に定着してきたのである。

「集中と持続」について、目に見えやすい実例を二・三紹介すると、まず「連続数字書き」である。これは細い縦の巻紙に1・2・3・4と数字をどこまでも書き続ける作業であって、単純で大変な根気を要する。毎年主として年長児が十二月頃から取り組むが、各年度に到達した最高の数字は次のとおりである。

年 度	連 続 数 字	人 数
五十一年度	一〇、〇〇〇	二名
五十二年度	三〇、〇〇〇	二名
五十三年度	四六、〇〇〇	一名
五十四年度	一〇、〇〇〇	二名
五十五年度	二〇、〇〇〇	二名
五十六年度	一〇、〇〇〇	二名

彼らは、園でも家でも暇を見付けては書き続け、直径が三十センチ以上になった数字の巻紙を宝物のように大切にしている。第二に絵本作りである。絵本作りには多数の園児が取り組むが、なかにシリーズ物を作る者がいて、十冊・二十冊と発展する継続物が生まれるのである。今日までの最高は、六十五冊であった。第三に縄跳び・鉄棒である。これは、次の項に譲ることにするが、驚くべき回数に達している。

以上、一部の实例をあげたが、「集中と持続」の体験を積んだ園児は、以前と比較して何かシンができてシッカリし、人が変わった

ような感じを受けるようになるのである。幼稚園児の場合、教師や親の単なる強制や命令だけでは、絶対にここに例をあげた段階まで到達しないのであって、モンテッソーリ教育法がある程度の成果をあげたものと自己評価している。

なお、数字に表わすことのできないものであるが、この教育法を取り入れた結果、子ども同志の思いやりや励まし合いが、ごく自然にふる舞われている姿（社会性の発達）を、しばしば見かけるようになった。

#### リレー・縄

#### 跳び・鉄棒

幼稚園時代の子どもにとって、「体全体を使った遊びや運動」に熱中することは、極めて大切である。この幼稚園でも、ブランコ・スベリ台・ジャングル・回転器等が備えてある。本園においても、これらの遊具は盛んに活用されているが、遊び（運動）における本園の特色は、リレー・縄跳び・鉄棒である。

#### リレー

本園の運動会では、昭和四十七年以来年長児の男女対抗リレーを行っているが、園児たちは当日はエキサイトしても、終わると特別の関心を示さなかった。ところが五十二年の運動会終了後から、年長児と一学年中児の間に自然発生的に関心が高まり、バトンを渡し音楽を流すと、いつまでもトラックを走り続けるようになった。五十三年度からは年少児も少しづつ参加し、自由時間にはいつも二十名・三十名の園児がリレーをするようになった。五十四年度の二学期からは三・四・五歳児混合のクラス対抗リレーができるまでに発展し、遂に毎日全員体操後の日課となった。これは幼稚園としては全国的にみても稀有のケースである。五十五年以降は、この各年齢混合のクラス対抗リレー（全員の）が、運動会の種目にも取り入れられ、大変な人気を博している。

なお、リレーと直接的関係はないのであるが、五十五年十二月から自然発生的に子どもたちの朝のジョキングが始

まった。早く登園した子供から一周五二・六メートルのトラックを十周、二十周と走るのである。五十六年度の最高は一三八周（七、二五八メートル）、ついで一三五周、一二八周となり、一〇〇周（五、二六〇メートル）の者が七名に達した。五十七年度には進んで二〇〇周（二〇、五二〇メートル）に挑戦し、成功した園児もいる。速度は問題にならないけれども、汗ビッシヨリになってわき目もふらず黙々と走り続ける「集中と持続」の姿は、胸を打つものがある。

#### 縄跳び

縄跳びは、創立時から積極的に取り組んだ遊び（運動）であり、全員に入園と同時に一人跳び用の縄を持たせている。しかし、結局「一人跳び」よりも二人の先生に廻わしてもらう「まわし跳び」が盛んになり、五十四年度には三歳児三名を含む五十余名（全園児の三分の一）が一〇〇回以上跳ぶほどに伸びてきた。まわし跳びが始まると、すぐ十数名の列ができて静かに順番を待つ。十五分も二十分も待って、自分は五・六回跳んでヒッカケても黙ってまた列の後につく。その意欲・素直さはいじらしいものがある。明確な目的とやる気を持った子どもは、平素と違うのである。なお、「まわし跳び」の各年度の最高回数に次のとおりである。

五十一年度	一、二〇〇回
五十二年度	一、〇四八回（この年度は一人跳びが盛んで、最高は四五〇回であった）
五十三年度	一、三〇二回
五十四年度	一、五二〇回
五十五年度	二、〇〇〇回
五十六年度	三、一七七回

## 鉄棒

鉄棒は創立当初に三基備え、五十二年度二基増置した。その周囲には、いつも十数名の園児が集まって、かわるがわるブラさがっている。子どもたちにとって、鉄棒の中で最も誇り高く満足度の大きいものは逆上りである。彼らは逆上りを続けて廻わることを「連続逆上り」という。これが何回続くか、課題のように毎日繰り返し挑戦する。教師は側で回数を数えてやるだけで、子どもの伸張を手伝うことになる。各年度の連続逆上りの最高回数は次のとおりである。

五十二年度	一五〇回
五十三年度	一三八回
五十四年度	三三〇回
五十五年度	八二回
五十六年度	一二五回

ここに記した記録は、一斉保育の中で育ったものではなく、自由遊びの時間に、それぞれの子どもが自分のやりたいことを（主体性）、自分の意志で選んだ（自主性）遊びの一つの結果である。毎日くり返している中に、確実に跳ぶ回数は増え走る速度は早くなって、運動そのものが楽しく好きになっていく。ここに幼児教育の要諦をみるのである。またわれわれは、先きに述べたモンテッソーリ教育法の「集中と持続」の観点から、子どもたちの活動を見守り激励し、援助しているのである。

合宿保育と  
福王寺遠足

年長児の合宿保育（一泊二日）は、四十七年度から始め、四十九年度以降毎年七月二十日頃、湯来温泉の湯来ロッジで行っている。全園児が参加する福王寺親子遠足は、四十九年度から毎年五月上

・中旬往復徒歩で実施している。他の園行事がそうであるように、これらも確呼たる目的・目標をもって行っているであって、本園独自の特色がある。

#### 合宿保育

親から離れ家から離れ、園バスに乗って可部から西西北約五〇キロの山奥に入り、自然に囲まれた中で先生と友達だけの宿泊生活を送る。子どもには初めての経験であり、身の廻りすることはすべて自分でしなければ誰も助けてくれない。昼間は水泳や散歩に元氣一杯はしゃいでいても、夕闇・消灯・就寝・川のせせらぎが耳につくようになる。次第に心細くなり、なかなか寝つかれない者もでてくる。教育とは、ある観点からすれば「子どもが、親から離れ独立して生活ができるようになることを助ける働き」である。ところが、最近は甘ったれた世相で、「親離れ」「子離れ」が悪く、識者の響聲（オウソウ）を買っている。この合宿保育では、

- ① 園児の独立性・自主性・逞ましさを点検し助長する。
  - ② 平素発見できなかった特性を見つけ出して今後伸ばす。
  - ③ 園児たちの相互信頼と友情を深め、二期期の共同作業へ展開する。
- ことを目的としている。園児たちにとって、貴重な体験であると信じている。

#### 福王寺遠足

福王寺登山は、小学校上学年から中学生・女子高校生の遠足コースであって、かなり急峻な坂や岩道もあり、子どもたちは登りに約一時間を要する。一緒に登った父母の中には、足を痛めて山頂到着と同時にヒックリ返る人もある。始末で、三歳児や四歳児にとっては難路である。これに往復挑戦し、自力で困難を克服することによって、

- ① 自信と自覚を深め、独立心と自主性を伸ばす。



② 二回目・三回目登山の園児は、昨年・一昨年の自分と比較して、自己の成長を具体的に把握し、自信と自覚を深める。

ことを目指して実施している。困難の克服・辛抱我慢で一貫するため「おやつ」は持参しないよう要望しているが、毎年よく守られている。但し、山頂到着・探険散歩の後は、組ごとに親子でゲームや遊戯をしたり、園児自作の母の日のプレゼントを送ったりして、楽しいひとときを過している。この遠足に参加することによって、新入園児の爾後の園生活に変化がみられ、発達の一段階を画している。なお、毎年数十名の卒園児とそのお母さんが、進んで参加されていることを申し添えておく。以上あげた特色の外にも、一年間園で学習したことを平常に近い姿で発表し、出演種目については園児の選択を最大限尊重する学習発表会、クラス全部のお母さんが一緒の席でそれぞれわが子の成長や悩みについて教師と話し合い、他の人も関連した体験を語り、全員で子育てを勉強する保護者懇談会等々、取りあげたいものが多々あるが割愛する。

#### (四) 母の会の活動

本園の「母の会」は、昭和四十七年（開園二年目）「すずらん会」として発足し、初代会長に桑原明子氏が選ばれた。爾来五十七年度までに十一名の会長が一年交替で就任している。

「幼稚園と家庭が力を合わせて、子どもの幸福と教育の発展を図り、お母さん自身の成長とその輪を拡げるため」のスローガンを掲げて、年々活発な活動を展開し、和気藹々とした雰囲気醸成された。そして、園行事への協

カバックアップ、会誌文集の発行、講演会講習会の開催、作品展当日のバザーや喫茶店の開設等々が、年中行事のようになってきた。

いわゆるPTAとしての「すずらんの会」の特色の第一は、会の活動がお母さんたちの自主的運営によって行われていることである。役員の選考決定はもとより、会費の決定、金の保管支払い、予算の決定執行、文書の起案、その他会の事務処理、決算等については、園はノータッチである。総会の開催、役員招集、諸行事の立案実施等も、会場の都合など必要事項については園と相談協議するが、実施はすべてお母さんたちの自主的活動である。しかも、園との連絡は極めて密接で、和やかな関係にある。このような完全に近い自主的運営は、珍しいケースではないかと考えている。園としては、どこまでもお母さんたちの意志と主体性を尊重し、園の御用機関にならないよう、ほんとうのPTA活動が展開されることを終始願ってきた次第である。

特色の第二は、自主的なサークル活動が盛んに行われていることである。園としては、お母さん自身が絶えず「目的とやる気」を持って進歩成長されることが、子どもが伸びるための最大の要件であると認識している。その意味から、サークル活動が盛んになって、ひとりひとりが積極的に参加し前進されることを待ち望んでいた。(園が主体性をとったのでは頼り気が出て本物にならない。長続きがしなかったり形式化したりする)。開園数年にしてようやく機が熟し、まず五十一年三月お母さんたちの「読書会」が開かれた。ついで五十四年「コーラス班」が、五十六年「手作り絵本の会」が、五十七年「手芸班」が誕生した。いずれも、二・三名のお母さんが中心となって会員に呼びかけ、自然発生的に結成されたものである。役員も自主的に決定し、生き生きと楽しく活動している。

### 読書会

第三章に記した「図書の貸し出し」の成果として、子どもたちの読書に対する関心が高まったことに刺激され、お母さんたちも本を読んで、豊かな心で子どもと向き合い、語り合うゆとりが持ちたいと始ま

ったものである。毎年五回程度開かれ、現在の会員約三十名である。皆で選んだ本を事前に役員が購入して、全会員に配り、自宅で読んで出席する。土屋主任を指導者として感想を腹藏なく語り合い、一冊の本をめぐって、泣いたり笑ったりしながら、普段みせない心の内を出し合い、お互の良いものを吸収し合っている。

一例として、五十三年度と五十六年度に採用した本を記載しておく。

五十三年度 五月 あゝの頃はフリード・リヒがいた（HPリヒター）

七月 アイオイ橋の人影（オフテンニコフ）

十月 絵本紹介。誕生の詩、からすたろう、わたしたちのトビアス

十二月 血族（山口瞳）

二月 天の園No.1～No.6（打木村治）

五十六年度 五月 幼なものがたり（石井桃子）

七月 ひーちゃんはいった——広島の少女たちの遺書（大野允子）

九月 金せん花と秋の蝶（山代巴）

十二月 出船の笛（山代巴）

二月 二つの国の物語（赤木由子）

### コーラス班

最初は、子どもの歌を習って家で親子が一緒に楽しく歌いたい〃ということから発足した。間もなくそれでは満足できなくなり、大学から教官を招いて指導を受け、輪唱・二部合唱・三部合唱へと発展した。五十五年度半ばからお母さんの中の適任者に指導を依頼し、一段と楽しく熱心な雰囲気盛りがあがってきた。約二十名の会員が、毎月二・三回園に集まり、思い切り歌ってストレス解消にも一役買っている。園行事の後

で、全園児を前に公演(?)するとき、一生懸命張り切って、中には多少あがり気味になる人もいる。

五十七年度に取りあげた曲は次のとおりである。

花のまわりで、野ばら、さようならみなさま、エーデルワイス、とんぼのめがね、グリーンスリーブス、赤とんぼ、ゆかいに歩けば、四季の歌

#### 手作り絵

#### 本の会

本園発足と同時に、子どもたちの絵本作りが始まり、年毎に個性的で充実した作品へと発展した。それが始まった。これが毎年作品展に展示されるうちに、お母さんたちが魅せられ、自分たちも是非作ってみたいとの要望が高まってこの会が誕生した。十数名の会員が月一回程度集まり、土屋主任の指導の下にお互の企画に対して忌憚のない意見を戦わし、厳しくまた楽しく作製(文も絵も自分で)するのである。素人離れのした見事な作品も多く、村橋小町氏の原爆をテーマにした創作絵本「アサガオ」が、五十七年東京の「らくだ出版社」から刊行市販された。園の作品展のとき、一部屋割当をもらって手作りの絵本を展示することが、会員の生き甲斐である。

#### 手芸班

毎年幼稚園の作品展で子どもたちの力作を見ている中に、お母さんの間から、自分たちの作品も持ち寄って展示しようとの気運が起った。五十五年役員が呼びかけてみると、絵画・彫刻・陶芸品・縫物・編物・手芸品等々、なかなか見事な作品が出品された。これに刺激を受けて、希望者が集まって堪能なお母さんから手芸の指導を受けようということになり、このサークルが生まれた。会員数は約三十名、学期に二回程度集まって藤細工・紐細工・和紙の小箱(引出しつき)粘土の人形等を作った。今年(五十七年)発足したばかりであるが、今後の発展を期待している。

## (五) 展 望

(一) 付属幼稚園の歩みで述べたとおり、現在わが国の幼児教育界は、園児急減という大変な事態を迎えている。これを、困った時代になったと消極的に受けとめるか、幼児教育界の質の向上をはかるチャンスが到来したと(従来金儲け主義的経営の園なきにしもあらず)積極的に受けとめるかによって、今後の展望対応が異ってくる。本園の立場は申すまでもなく後者である。この機会に、もう一度原点に返り志を新にして、

① 幼児教育の理想的あり方の追求

② 保護者・社会の正しい要求に即応する努力

③ 愛情をもってひとりひとりの子どもを大切に伸ばす実践

を真摯に積み重ねていかなければならない。そして、小人数を収容して、徹底した保育を実践し、保護者と社会の信頼をより深めることが重要である。そのためには、第一に教師の精進・研修・教育力の向上が、第二に園児急減の新しい事態に應ずる経営態勢の確立が要請される。

次に、大学の付属幼稚園としての本園の使命を考えてみると、左記の三点である。

① 充実した保育実践によって子どもたちを十分伸ばし、地域社会に貢献する。

② 徹底した教育実習生の指導を行い、優秀な保育者を教育界に送り出す。

③ 大学の幼児教育学科と一体となって、幼児教育の実践的研究をすすめ斯界に貢献する。

この三項目のそれぞれについて、今後の展望を簡単に述べることにする。

まず①項については、これまでの若手中心の教員組織（園長主任を除けば、毎年度切めの平均教職経験年数三年未満、甚だしい年は平均一年、次で平均一、二年）からすれば、良く努力していささかの成果をあげ、保護者の信頼を得たのではないかと自負している。その一端は、教育の特色に記載したとおりである。しかし、それもわれわれの目指す理想からすれば、遠く及ばないものである。さらに厳しい研鑽精進を続け、教育力の向上と実践成果の集積・活用をはからなければならぬ。そのためには、

ア 元来、教育の仕事には「これでよい」というゴールはなく、また手軽に成果をあげる便法もない。愛と熱と根気をもって、励まし合い協力し合いながら進む無限向上の厳しい道であること。

イ 仮令未熟な教師集団であっても、絶えず努力し常に進歩することによって、子どもは伸びるものであること（反対に、老練な教師であっても、進歩が止まれば子どもの伸びは鈍る）。

を銘記することが大切である。

使命の②項については、元来教育実習は、大学で学んだ知識理論を教育現場で生きて働くものとする機会である。

教職とはいかなるものであるかを体得し、教師として必要な実践的知識技術を修得し、子どもに対する理解と愛情を深め、教育に対する意欲と使命感を強めることを目指している。この目的を達成するためには、かなりの実習期間と経験豊かな教官陣の指導が必要である。現状は、両者とも不十分であるため、一生懸命努力はしているけれども、十分満足できるものではない。これは意気込みだけで解決できる問題ではなく、それぞれ隘路がある。今後、大学側と協力しながら、広い立場に立って一步一步理想に近づけなければならぬ。

使命の③項については、園側の体制が未だ整っていない。注目すべき研究も行われ発表されているが、それは土屋

主任の個人的研究成果であって、大学と園が一体となった組織的研究ではない。この問題は、理屈だけではなく、ならないのであって、まず若い教師陣が経験と研修を積み実力をつけて、

ア 大学教官の研究内容を十分理解し、ある意味で共同作業ができるまで成長すること。

イ 日常の保育実践について、精神的にも時間的にも、ある程度の余裕が持てるようになること。

が先決である。そのためには、勤務年数三・四年で次々退職して新任者を採用した従来の人事構成では問題にならないし、その他いろいろと困難点がある。今後、全学園的な一つの課題として、長期展望に立って、少しづつ条件を整えていく必要がある。

最後に、本園は、現在の幼児教育界においては、恵まれた環境にあり努力のし甲斐がある。課題が多いこと、若い教師が多いことは、同時に活力の源泉でもある。いかなる場合も現状に満足することなく、常に課題を求めて前進を続け、幼児教育並びに幼稚園の理想の姿をどこまでも追求する限り、そして、魂のこもった心の通う教育の実践と、保護者子どもに入卒園してよかったと心から喜んでいただける幼稚園の実現という理想を、どこまでも深め高める努力を継続する限り、将来の展望は洋々たるものがある。

### 付記

本稿の枠組やページの配分には、問題があるかも知れない。担当者は、限られた紙数の中で一応の形式を整えながらも、附属幼稚園発足後十年余の期間本園に勤務した教職員は、「どのような考え方・理念をもって」日々の保育を行い園の運営に当たったかを、できるだけ明らかにすることに重点をおいて書いたものである。従って、観点・立場を変えれば、自から異った内容の記述になるであろう。このことを特に書き添えておく。

(文責・佐伯茂重)